



## 「小さな塵の大きな不思議」

ハナ・ホームズ 著,  
岩坂泰信 監修, 梶山あゆみ 訳  
紀伊国屋書店, 2004年 3月,  
428頁, 定価2,800円 (本体価格)  
ISBN4-314-00957-8

「塵」を素材に、よくもこれほど広範囲の事象に目を向け、しかも面白い読み物に仕上げたものだと感心させられる。本の英語タイトルは The Secret Life of Dust で、サブタイトルが From the cosmos to the kitchen counter, the big consequences of little things とついている。タイトル通り、Dust の対象は、宇宙の塵から台所の塵まで、まさに塵のオンパレードであり、塵の生涯にまつわるエピソードで散りばめられている。

著者のハナ・ホームズ氏はサイエンス・ライターで、デスカバリーチャンネルのオンラインの特派員として、世界各地で行われる科学的な研究調査に同行していると聞くと、彼女のユニークな着眼点や読み物としての面白さ追求の背景が理解できる。同時に、彼女が自分の夢を実現するために、海へ、山へ、砂漠へ、南極へと立ち回るフットワークの広さと強さには驚かされる。翻訳家である梶山あゆみ氏の訳は、日本エアロゾル学会長でもある岩坂泰信 (名古屋大学教授) 氏の監修を得て大変読みやすい。

岩坂氏は「解説」の冒頭の部分で以下のように述べている。

「この本は、宇宙の塵から大気中に漂っている塵、海の中や氷の下の塵、家庭の中の塵 (ハウスダスト) にいたるまで、きわめて多様な塵をめぐる話題を深く取り上げている。著者は、専門家相手の本ではないと断りつつも、私のような、この方面の研究者が読んでもわくわくするような、最新的话题をうまく料理してくれている。目に見えない塵が、自然界のさまざまな不思議な現象を演出し、地球環境から人間の健康まで、いろいろなところで重要な役割を演じていることを読者に示す、この分野を紹介する格好の道案内の書といえる」。さらに専門家の方への断りに関して、「著者は、気体の分子が集まってきたばかりの極めて小さな粒子 (このごろの流行の言葉で言えばナノ粒子) から比

較的大きい粒子 (砂塵やスス) までを塵と呼んでいるために、ややとまどう向きがあるかもしれない」、「…同じ化学組成でできていてあるいは同じ形状であっても、大きさが異なればその機能が異なるからである。でも前後の関係からどのようなものをさしているか、あるいはどのような性質を言わんとしているか見当が付くだろう」とコメントしている。

また、訳者の梶原氏は「あとがき」の中で、「地球も私達も塵から生まれ、膨大な量の塵に取り巻かれて一生を送ったあと、最後は塵に戻る。ほとんどの読者はそんなことを少しも意識せずに暮らしてきただろう。だが、本書を読み終えた今、どこか世界がほんの少し違って見えないうだろうか。少なくとも、当分は何かにつけて塵のことが気になって仕方がなくなるはずだ (私もそうだった)」と感想を述べている。評者は、岩坂および梶原氏が本書の当事者であることを考慮しても、両氏の適切な解説や感想に同意せざるを得ない。

この本は塵を次の11の章だてで取り上げている。一粒の塵に世界を覗く；星々の生と死；静かに舞い降りる不思議な宇宙の塵；砂漠の大虐殺；空を目指す塵たち；塵は風に乗って国境を越えて；塵は氷河期に何をしていたのか；ひたひたと降る塵の雨；ご近所の厄介者；家の中にひそむミクロの悪魔達；塵は塵に。まず各章のタイトルが読者に興味をひかせる。例えば、第10章「家の中にひそむミクロの悪魔達」って何だろうと思わせて、曰く、…ハウスダストの中には、パーソナルクラウドという非常に個人差のある塵がクラウド (雲) のように常に身の回りに漂っている…、ひとりの成人の体からは一日におよそ5000万個の皮膚のかけらがはがれる…などと次々に不思議さを撒き散らす。

本書は、「塵」を軸に、地球と宇宙という自然、そこでの生物の営みについて、圧倒的な新しい事実の塊とそれにまつわる不思議さを与えてくれる。また、科学者の生き生きとした挑戦ぶりを垣間見ることが出来る。ひとつ難をいえば、紙幅に比べて対象分野が広過ぎることから、さわりの部分で終わっている嫌いがある。しかしながら、更に追求したい読者には、巻末の参考ウェブサイトと膨大な参考文献リスト (英語ではあるが) が用意されている。気象人にとっても大いに好奇心をそそる書である。

(気象コンパス 古川 武彦)